◇講演◇

子どものしあわせ

羽仁説子

マッチ売りの少女

私はたぶん、日本の最初の幼稚園のあたりの生徒だったんじゃないかと思うんです。あれからもう半世紀が過ぎ、もうそろそろ七十が近いの。そうなってみると思い出すのは、やっぱり幼児の時のことです。その思い出には色もついてるわ、話もあるわ。そしてそのあたりの建物だのなんかもみんな思い出せるわ。私は、やっぱり人間の一生にとって非常に重要な影響をもっているのは幼児期だと思います。

それは、一昨年でしたか、アンデルセンの記念に何か書けとおっしゃったの。アンデルセンといえば、いろんなことがあるはずです。だけど、一番さきに思い出したのは私自身の幼いときのことです。私の母は日本の最初の女の新聞記者でした。その当時の職業婦人っていうんだからずい分苦しかったと思うわね。そこに私が生まれる。そして私のために家に落付く時間がないっていうことを苦労にしてたんじゃないかしら、一週間のうち二日だけ、私が寝こけないうちに帰ってきて本を読んで聞かせてくれる。それで読んでもらったのが、アンデルセンのマッチ売りの少女。

今考えてみると、心理学的にも寝る前の時間が一番幼児に影響力がありますわね。その点で、幼稚園で昼寝させないの、損だと思うのよ。保育所の子は昼寝をするの。幼稚園には今それがありませんものね。卒直にいったら、子どもたちは猫をかぶってる。これはあとでお話すべきことだけど、この間テレビの番組で、性の問題について幼稚園の先生方にも小学校の先生方にも、保母さんにもお会いして懇談しましたが、性教育について幼稚園の先生は本は読んでいらっしゃるかもしれないけれど、実際の子どもの性の悩みについてはご存じない。保育所の先生

は長い保育時間で本も読めない。だけど、子どもたちを一日中かかえてるから、人間が小さい時から性の問題をもち、悩んでいることを知っている。幼稚園の先生方にも考えていただきたいと思うの。戦前につくった私たちのグループでも、思いきって時間を長くしました。そうしないと本当の子どもの生活っていうものは見られないと思ってやってみたんです。

私は幸せなことに、母がアンデルセンを読んでくれたでしょ。ひるになるともう母はいない。母の声をなつかしんで、電信柱によりかかって暗唱する。母の東北弁をまねたりして。そうしたなかで、私はいつもいつもマッチ売りの少女のことを考えつづけます。自分が売らなきゃならない、食べていかなきゃならないためのマッチを全部すっても、暖まることができなかった。そして翌日、雪があがって朝日がさしたら、お金持のポーチのところにそのマッチ売りの少女はなんの苦労もないような、きれいな顔をして死んでいた。幼い私は考える。そして「どうしてマッチの箱が全部なくなるほどマッチをすったのに、お金持のうちの人は気がつかなかったの」って。叔母さんが答えてくれる。「お金持の人って踊るのが好きだから、ダンスしていたのよ。」私はアンデルセンが救いを出して「死ぬ前に、亡くなったおばあさんが迎えに来てくれた」というのを暗唱してもその前に誰も見つけてくれなかったのかと、考えこみましたわ。

後に、アンゼルセンの伝記やそのあたりの歴史を読むようになって、やっぱりアンデルセンは幼い私にかたりかけていたんだ、ということを悟るおもいです。アンデルセンは、むしろ童話に託して彼自身の悩みを考えていた。社会の貧しさ、苦しさ、というものに本当に悩んで、どうかして幼児を救わなければならないと考えたんでしょう。幼児の第一の課題は生きるということ、たのしいこともかなしいこともあるけれどそれでも前進するという強さを、私はいまもあのおもいでのなかで与えられたようにおもいます。

最近の幼児教育

ところが最近、字を教えるってことが幼稚園でさかんになるとうかがってがっかりします。私は反対です。日本で最初の音楽早教育の実験を園田さんと始めたのは私です。ところが、十年もたったら「天才教育」という名に化けました。三歳になれば人は誰でも耳の感覚が発達してきます。そして人間は三歳の時が一番耳がいいともいえるのです。それだのに、なんで一番不得手な、手を動かすことで字を教えるの？　活字時代になって、子どもたちが字をかく要求をもっているといいますが、この間もテレビでお習字の塾で、「ろの字がうまくいかないから、先生がしばらくまるばかり書いてろっていった」なんて……。

そんなことしてるより耳が発達してきてるのです。充分、物を読んであげる時期なの。文学は字で読むんじゃないわ、心で読むのよ。幼児期は、人生は何だろうって一番熱心に考えている時でしょ。人生に出てきて驚異する心、なんでも敏感に純粋に、決して既成概念にとらわれない。ロマン・ロラーンのジャン・クリストフのなかにも、幼児のその気持を鋭く描いています。宇宙はますます広くなるのです。どうして生きるか、幼いものの夢をそだてたい……。

このごろ身上相談を引受けているので考えさせられます。本当に人間がわかっていたら女をすてることのできるような男はいないと思うわ。女が自分のおなかの中で十ヵ月、もう一つの命を育てることができる、これは人間としてすばらしい能力だと思うわ。だのにどうしてあんなに男に女がすてられるんだか、私にはつらくってわかんないわ。女である前に私たち人間なの、そして私たちも命なら子どもも命なの。おたがいにその命がこの広い宇宙に生まれてくる。ここに私たちの教育がなければならないと思うんです。子どもはおとなに対して決して別のものとは思っていないわ。同志だと思ってるわけ、この人も人生に出てきて、わかんないことが多くて悩んでいるんだと思ってくれてるのよ。ところが先生たちは万事わかっていて悩みがないような顔してそっくり返っているんです。だから子どもが先生を利用することになる。大岡裁判みたいなことといって得意になってもしかたありませんわ。幼児教育っていうこと、もっと考えなければしょうがない。

きょう、久しぶりで周郷先生にお目にかかったので思い出したんですけれど、「シベールの日曜日」という映画をご一緒に見に行ったの。この中に出てくるのは一人のかわいい少女と、気の狂った人なの、戦争に行って気が狂っちゃったの。その二人の友情をえがいてあるの。それを、普通の人が見て、「あれは女の子をいたずらしてるんじゃないか、女の子をいじめてるんじゃないか」ってまるで逆の観察をする話なの。狂ってるのはどっちかって、私も思ったし周郷先生もそうだとおっしゃるの。私は、その狂っているといわれている人の方が、生きていて人間としての気持をもってるんじゃないか。幼児と正直につきあってゆける。今の日本は、なさけないほど何でもかんでも狂ってる。とうとう総理大臣まで頭へきて同じ答弁ばっかりしてるんだわ。狂ってないのは幼児よ。幼児は人生に対して非常な驚きの心をもって、正直に、まじめに見ている。幼児は日本の救いです。

ある意味で今度の中教審だって、幼児に目をつけているという意味では賛成だわ。だけど中味は全然反対じゃないの。日本を本当にしょってくれる人として、すべての子どもを見ような

んて考えないじゃないの。幼児教育にまで下がってきて、干渉してエリートを出そうっていうのでしょ。早熟教育を急ぎ、飛び級だなどといっている。幼児学校っていうのは、ロバート・オーエンが労働者の人権と質の向上と、空想社会主義の悲願をこめてつけた名前ですわ。幼児学校は、人と人との平等のために使われなくてはならないもの。現代もまた、産業革命時代ともくらべるべき混乱の時代のようにおもいます。幼児からやり直したいと考えない人はないけれど、中味にいつわりがある。

私の幼児教育

私の幼い日のおもいでに、日曜学校でもらったカードのことがおもいうかびます。私の母は、あのころ事情があって私が教会へ近よることをこのまなかったようです。でも私は近所のお子さんに誘われて教会へ行き、牧師さんの奥さんという美しい外国婦人にカードを手渡された。美しい花ととってもかわいい鳥が書いてあった。お手伝いさんにカードを読んでもらったら、「神の許しなくしては、一羽の雀も落ちることはない」と書いてあったのです。いまなら人権尊重といいますが、いのちの尊さ、重さをずっしりと幼いものに理解させることばでした。だんだんおとなになってきたら、その力は真理というものかもしれないし、ある人は神といい、仏といい、それが私たちの命というものを見てくれている。それだのに、人は自分の命を恥じて、自分の命をそまつにするんです。

なんだか自分の命を恥じている人が多いのは、やっぱり幼児教育の問題だと思うの。「一羽の雀だって神の許しがなければ落ちることはない」という自信を、ぜひ子どもにもってもらいたい。子どもたちじゃなくて、子どもたちを教育してくださる皆さんにほしいの。子どもはいつも先生の言葉は上から降ってくる言葉なので共鳴がうすい。子どもは脊が低いのですもの、私たちの気がつかない地面をはっている物がとても好きじゃないの、それだのに今までの教育は上から教えをたれる。

どこかの絵本ですけれど、その中にね、波紋、石を投げると輪ができるでしょ。それから子どもは輪を押して遊ぶでしょ。その輪のこと、お話に書いたのがあって、本当にきれいだと思ったわ。「ろの字が書けないから、輪ばかり書いてろ」なんて、そんなことで人は生きていて良かったなんて思えないわ。輪なんてものは、ほかのことを教えたいわ。ほうれば波紋でしょ、そして自分たちは輪を押して走るんでしょ、その輪につかまれば空にも行けそうだし、輪にはいろいろな意味があるじゃないの。人間として、同志としてこんないやな世の中生きていくのに、この子がどうぞいつまでもきれいであってほしいという祈りをこめて私たちがしなきゃならない保育だとおもいます。

この間、十三歳の少年が近所の小さい子をかわいがっていて、しかもその子の首をしめて川へつけたという悲惨な話がありましたね。それをテレビがとり上げて私に来てくれということで、その殺された子のご両親とおあいしました。その少年は、いろいろ複雑な問題があるのですけれど、たった一間に夫婦と子どもが一緒に住んでいるの。そして本当に悲しいいろいろな性の刺激があるわけなのね。私が何よりも感じたのは、おとうさんがお酒飲みすぎるの、飲んではその子をひどく叱るの。それがこわくて「女の子にいたずらしようとして女の子にひどく反抗されたので、父親に叱られては大変だと思って殺しちゃった」って泣く泣く訴えたらしいの。「どうして川へ入れた」っていったら、「首をしめたら、まだ手やなんか動かしてる、また生きてきてとうちゃんにいいつけやしないかと思ってこわくなって、そうっと水につけちゃった」って。

私はその時つくづく思ったの。「あー誰かこの少年に、おとうさんに叱られるよりも強い影響をこの子にもつ人がいなかったかしら」って。誰か自分の悲しみをきいてくれる人があったら「叱られてもしかたがない。いざとなったらあの先生のところへいこう」という気になるわ。それだのにその子どもの行っている特殊学級の校長さんはテレビ局の取材に対してさえ、受持の先生に会わせないんです。ことなかれで、自分に責任がふりかかるのを恐れている。最初に「こんな事件を起こしちゃったから、あの子の家はじきに引越すでしょ」といったのにはあきれました。自分の学校にいなければ責任がない。今の学校教育法に退学があるっていうことは本当にふしぎだと思うわ。キリストは人に退学なんかさせなかったわ。一番ひどい強盗と一緒に十字架にかかったっていうことはそのことです。

このごろ、中学生でも高校生でも、さかんに退学させるらしいわね。でも幼児期にはそんなことといやですわ。手がかかるっていうだけよ。幼児なんか。前に私が本に書きましたけど。今なら自閉症っていうのね。あんなことといって、お医者さまと心理学者が忙しいだけよ。自閉症なんて、すばらしい保母さんがいれば治っちゃうわよ。私、経験があるんです。それはおかあさまにもあんまりものをいわない子で、だいいち学校にはいってこないの。門のところまで来ると泣いて泣いて、おかあさまは「思いきっておいてまいります」って帰っちゃうでしょ。しかたがないからこっちが食べ物をもってくしまつ。そのうちに、私のとこでウサギを飼ってるの、これも私の考えで、命は命で教育するのがいいと思って、ウサギに親切にするっていうことが自分やおかあさまや、先生の命のこともわかるようになるきっかけをつくるという考えでした。そのウサギにその子が興味をもったらしくてある日ウサギとおしゃべりをしている。人間

とはしゃべらないけどウサギとしゃべってるの。それから私はそのとなりへ行って、ウサギにしゃべりかけるの。そうね一週間ほどすると、ウサギを媒介にしてその子が返事をしてくれるの。「先生、そうじゃないっていってんだよ」なんてちゃんといえるのよ。それが続いたわ、二ヵ月くらいも。

そのうちに夏休みになっちゃったんです。そこで私は「○○ちゃんウサギをあずかって」「大変だと思うけど、おかあさまにもお願いしとくからね」っていったら、もちろん返事も何もしないわ、ぶすっとしたような顔してるだけ。でももって行って夏休み中、かわいがってくれました。そして夏休みがすんで、みんなが絵やなんかを持ってきた時に、一学期にはウサギのところへしか行かなかったのが、入り口のところへはいってきてるのはいいけど、そこへ寝そべってるんです。そして変な目つきでこっちを見てる。けどね、私はうれしいと思ったの。ウサギのところからそこまで出てきたんですからね。そうすると気のきいたような、いわゆる秀才タイプの子が、「先生、○ちゃんあんなところで寝そべってるよ」余計なお世話だわ。私はね、「○ちゃんは、どうしてもきょうはここへはいれなかったんだからね、かんべんしてね」っていったの。

そのうちにその子の絵の番になったの。その子のお姉さんは夏休みにひまわりを育てました。その大きなひまわりの下に、私は特別のウサギがいいと思って真黒なウサギをその子にやったの、その黒いウサギがまっ黄色の花の下にうずくまっているすばらしい絵。子どもは自由ですから、みんな手ばなしでほめちゃった。みんながほめてくれるから私、うれしくなってね、ひょっとその子の方を見たら、人相の悪いのが一度にどっかへいっちゃって、なんともいえない顔してにやついてるの。それから私はとんでってその子を抱いて、みんなのところへ戻りました。「いま、みんなにほめてもらった絵をかいた人です。裏の名前をいおうと思った。だけど先生、それより前に○ちゃんを見たの。そしたら、○ちゃんうれしそうにして……○ちゃんといっしょにみんなを驚かそうとおもって」といったら、みんなまた、腰がぬけるほどびっくりして、拍手、拍手。

人っていうものはそういうものよ。勲章などさげてることないわ。私、ソビエトは幼児教育についても大先輩だし、いろいろ感謝してるけど、勲章いっぱいつけてるのは大きらいですわ。勲章より、自分のなかにわきあがってくる喜びと自信とが尊いのだわ。

その子は、それ以来みんなの中にまじってくれました。その間がわずかに四ヵ月かからないくらいよ。このごろまた、自閉症、自閉症っていうの、これにはまたいろんな問題があると思うんですけれども、私は字を書いたり、幼稚園で評価をするな

んて大きらいです。人間は誰でも成功感というものをもってるわけね。幼児を見てごらんなさい。お砂糖をいたずらして、こっちの砂糖入れからあっちの砂糖入れへ全部うつしたらうれしいの。やってる途中でママに見つかってとりあげられたら成功を感じないの。子どものいたずらっていうのは、全部の人間がもっている、自分の仕事に対する意欲です。子どもはいたずらの中で自分の成功追求の意欲を発揮して、くだらないことをしたとか、こうやるからダメなんだというようなことを学ぶんです。

中教審答申案に思う

次に、現代の問題としてみなさんに考えていただきたいのは中教審のこと。今まで幼児教育に対して文部省は、ぼけてましたわ。それがにわかに干渉してくるようになりました。大脳生理学の進歩によって、人間は幼い時からものを考えているなどとうたい文句にしながら、人間を問題にしてるんじゃないんです。焦ってるんです。こんどの中教審を歓迎しているのは財界だけだと新聞が報じていますが、幼児はいまおとなになるのではない、三十年四十年後に日本をせおうのです。しっかりした見通しをもってあせらずに、ゆうゆうと教育をすすめたい。

人権尊重というのは法律の言葉ですが、それが、今日の公害だらけの世の中が変わらなくてはならない。哲学的な意味です。幼いものを育てるというのはそのことです。資本主義末期で自転車操業の世の中、アメリカは日本を捨てて中国へ行こうとしている。でも私は、子どものことを考えたらあわてふためく必要全然ないと思うの。むずかしい混乱の世の中であればあるほど、小学校へ行くまでに、子どもたちには人間としての自信をもって落付いてもらわなくちゃならない。私の考えでは、小学校の低学年でも同じいき方でいくのがいいと思っています。

私は、ずっと前から通信簿について、文部省がすくなくとも校長先生の自由をもっと認めてもらいたいと思っていました。一学期の終りに点をつけるなんて、よっぽどえらい人だわ。このごろは行動っていう点までつける。喧嘩したとかしないとか。夫婦が本気になって人生を歩もうと思ったら、喧嘩するのはあたりまえだわ。喧嘩なんて人間の性質っていう、命にもっとも近いおもしろい問題と考えたら、運動場の喧嘩をみるひまもないという先生が、どうして、大胆に点をつける。試験でみる点が正確なんてまちがってます。子どもたちは、先生に魅力をもっているのではないので、点をつけられることをおそれている。あんな暗い小説を書くドストエフスキーは、「教育力をもつものは、父と母との美しい思い出である。父と母の美しい思い出をもっている人は、たとえ罪をおかすことがあっても立ち直る

ことができる」といってます。それがほんとのはげましだと思うわ。私は子どもが人生の最初に出あう保母さんたちにそれを期待したいわ。

文部省は、それですのに、保母さんの待遇を悪くしているのです。大学の先生になるには資本がかかっているから報酬もたかいという資本主義理論かしら。幼児のための教育は人間に接しなければならない教育の分野ですから、もっと受持の人数を少なくしてもらわなきゃだめです。もっと保母さんの数がふえて、少ない人数を見ることができるというふうになれば、ずっと仕事が運ぶ、保母と子どもがゆっくり人生を話し合う……。

恐ろしい話があるじゃないの。最近永山少年というのが死刑を宣告されました。連続射殺事件の犯人です。つかまった時にお母さんがテレビで泣いて話をしました。「学校では年中一をもらっていた」っていうの、その少年はこのごろ本を読むようになった。弁護士に「自分はこんな本を読みましたけど、ここんとこがわからない」なんてさかさに聞くようになった。

でも彼はもう死ななきゃならないのよ。

私は、今までの教育は間違っていると思うわ。なんで一をくれたの？　〝人間〟ていうことがわかっていないから、彼の性質を見ることができなかった。彼は孤独な性質だと思います。そして孤独に耐えることができる。一つ読んだものを、徹底的に読む性質をもっているの。私にいわせれば、学者になれる素質です。しかも、少年の環境は過疎の農村で、父親は出稼ぎでなくなり、学校は欠席ばかり、母親は集団就職にのぞみをかけたけど、都会の過密に彼はなじめず、自忘自棄のどん底に落ちてしまった。ほんとうは本を愛し、本を読んで、その質問を楽しむ少年は、死刑囚としていのちをおとす。

中教審の出た翌々日に、全国の教育研究所の調査として出された「義務教育を終わった五〇％の子どもが置き去りである」というのは、中教審より教育の大事です。自信のない人間が五〇％で、教育はなにをしているのでしょう。小学校に来た時に、子どもたちはもう自信がない。「私、幼稚園であんまりいい子じゃなかったのよ」なんて自己紹介するのがある。私、がっかりしちゃうわ。「ママの生みつけが悪いから算数はできません」なんていう一年生の作文がある。そういう時、私、一生懸命キスしてやります。「大丈夫、大丈夫、これからでも間に合うわ」といって……。小さい時から自信を失っている人間は、ずるくなり、卑屈になり、ごまかそうという。恋愛だって、自信をもって徹底的に自分の愛する人を愛してみないの？　そして、人間は恋人を愛するだけじゃないわ。全人類を愛することができるはずでしょ。だから今は、平和教育っていう問題が全世界で考えられるようになったの。

周郷先生のお訳しになったバーナード・リードの「平和教育」っていう本もあるでしょ、あれもぜひ読んでちょうだい。リードの文句で、私は大好きな文句があるの。リードはイギリスの美学者でしょ。彼は美の研究をしてきて、美を長い間追求してきて「人類は始まって以来、美というものをずっと追いかけ通してきた。ギリシャにも美しい彫刻があるし、ルネッサンスがあり、ピカソまで人間は美というものを追いかけてきた。それにもかかわらず、人間が全然触れていない美がある。その美とは何かといえば、人間関係の美である」と看破している。教育は、その人間関係を失ってます。私は、それを回復してくださるのは保母さん方だと思います。

幼児期＝文学年齢

私はよく、幼児期のことを文学年齢とか、詩人年齢とかいう。そういう言葉は、私が文学が専門でないのに少々軽卒かもしれないけど、文学がわかってくれるのは幼児期だという思いはかくしきれません。人間がロマンチックであるっていうことは、人間の基礎です。想像力が豊かじゃないなんていうのは何も理解できないわよ。これは科学ではっきり言ってます。湯川さん、武谷さん、坂田さんの原子物理学の発見者も書いているけど……。

ある男の子、今年の四月に小学校へはいった子の話です。そのおかあさんが男の子なのに「がさつでしょうがない」とかなんとかいってすごく気にするんです。それでそのころ「キツネ山の嫁入り」っていう本をいただいたので、おかあさんにその本を送りました。スキーにゆくとおっしゃるから「スキーに行ったら、ひどい吹雪の晩に、これを子どもに読んできかせてください」ってお願いしたの。この話は、文明がどんどん山をおかして行って、キツネさえも、キツネ火も里の方では燃えなくなった、奥の方にしか住めなくなっちゃった。それで十何番目かの子がお嫁入りの時に、とうとう山のけわしい所を提燈を下げて行ったものだから、お嫁さんが落っこっちゃったかなんだか、いなくなっちゃうの。するとキツネ山中のキツネが提燈をつけて、毎晩々々お嫁さんをさがしているっていう詩なんですけど、それを絵にしたものなの。その男の子の帰るのを待って「あれ読んでくれた？　先生待ってたのよ」っていったら、ちょっと考えてましたけど「先生、キツネ山のキツネは親切だよね」っていうのです。がさつなんかじゃありゃしないわ、子どもには本当の人情が、かなしさがわかるんです。

団結だなんて口でいうことじゃないわよ。私は、団結の基礎にも友情がなければしょうがないと思います。中では派閥だなんて喧嘩ばかりしていて、そして団結だなんてことないわ。人

間として子どもは友情ってものをわかってくれるのよ。それを文学としてわかってくれるのよ。その詩がゆっくりした調子、詩だからその子はそういう調子で「キツネ山のキツネは親切だよね」っていうの。いつものその子とは思えませんでした。

私に未央のほかに、娘のところにもう一人孫がいます。私のところへ講演を頼みにいらした方が、その孫がひょこひょこやって来たもんで、男の子なんですよ、その時四歳半だったかしら……、それをつかまえて私のことを「この人は誰ですか」ってお聞きになったの。その方はもと校長先生だった方で、先生らしいわね。身分ばっかり気にしてるんだわ。だから「この人は誰ですか」「おばあちゃん」ていわせようと思ったんでしょ。けど私の家は、お嫁さんとか、おばあちゃんとかっていうのは一種の身分を考えているから、使いません。みんな愛称で呼びあうの。実は私はウサギっていうことになってるの。ウサギ年に生まれて、日なたが好きで、日なたで原稿書くもんだから、「ウサギさん」ていわれるのだけど、それじゃまずいと思ったんでしょ。その孫は考えていましたけれど、その方が「あなたの誰ですか」ってまた念をおしたので、「この人は紫の人です」と答えました。私、紫色が好きです、ふだん着に年中紫色ばかり着てます。その校長先生がびっくりしてるもんでね。孫はちょこちょこって走って行って、庭にちょうど朝顔が咲いている、そこに行ってニコニコして立ってるのです。全く幼い子は文学的よ。朝顔が咲いてるのを知ってるんだわ、それが紫色ってことも。

保育者の方々に

戦争中、大塚の公園でグループをもっていました。不特定の大ぜいでしたが、そのなかにバカと呼ばれる男の子がいました。その子といっしょに日輪の花をそだてる仕事をして彼が自信を回復するのをみました。他のグループではすぐ腹をたててかみつくのがいて、「先生、あの子はあんまりひどいからお断わりしましょう」っていうの。私は思ったわ。捨てる命なんてないわ、自然を見てごらんなさい。小さい花でけちな花なんてどこにある？　なぜ花は捨てるものがないのに、人間は捨てるものだらけなの？　結婚する時、女は簡単にあきらめるわ。「私だからしかたがない」なんて。そんなことないわ、小さな花とはでな花を生けるから美なんじゃありませんか、ダリアとユリの花、大きな花と大きな花を生ける人はないわ。大きな花には目立たない小さな花を添えることが大切です。それがこのごろ、お花のけい古っていうと、大きな花を生けて、家へ持って帰って、家はアパートの狭いところなの。なにがお花のけい古だかわからないわ。子どもたちがお花についてよりももっと浅薄に

みられているのですから腹が立ちます。

今度の中教審に対して大学は相当反対しているから、大学はいじれない。高校はすでに、多様化という名の差別で抵抗しているから、文部省は幼稚園に干渉しはじめるわよ。そしておかあさまがそれにつられてあせり出す。保母さんはその点でおかあさま方を説得できなきゃだめですよ。小さい時から競争させてるんじゃない？　花を思い出してください。そこいらに咲いている毒だみの花だってきれいじゃないの。はっきり個性をもっている。人間にとっても、人間らしさを、おおらかさを、ものの考え方の個性、やさしい心、なんでも珍しく、よく見る、科学的な気分を育てる時なのです。それが、五〇％が義務教育において置き去りにされているような教育が、幼児にまでくりおろされてくることに反対し、真の幼児を守らねばならないと思います。早教育といって早熟教育をすることは間違っている。文部省は、水道方式ひとつ理解できないで幼児を教える資格はないわ。私は、水道方式よりまだ前に、幼児は三歳半から四歳ぐらいのところで、量がわかってくる。勘定なんていうのは抽象化された数で、ずっとあとでやればいいことを、方々にかいています。でも、考えてくださらないのね。「中教審が出たからと、その通りやるのはしゃくだから、それにちょいと改良を加えてやるうちになんとかなるだろう」では、芽はのびません。思いきって研究会など、どんどん開いて、体験を話し合い、子どもたちの真の悩みをとりあげて、新しい幼児教育の道を開拓したい。このさい、子どもたちのために、ふだんできないほどの力を出してゆくことをしたい。誰がほめてくれなくても、いつか子どもたちがあたたかい日本をつくってくれるでしょう。

聖書には書いてあります。「人、その友のために命をすつ。これより大いなる愛はなし」愛という言葉はむやみに使われ、愛なんてなまやさしいものじゃないといって、女は甘いという人があります。自分の命を人のために使うことができるというほどの愛、そんな善人にはなれないにしても、花の蕾のようにかわいい幼児のために愛を貫くことのできないはずはない。私たち幼児教育にたずさわっているものは、幼児のために命をすてたっていいと思うの。本当にいくつかの幼児の命を生かすことができたら、私たちはそれが本当の喜びだと思います。劣等感だの、しっとだの、差別だの、官僚的派閥だの、軍国主義だの、みんな子どもたちのゆがみのなかでかもしだされるものです。

みなさんも、ぜひ本気で日本の子どもは日本の未来なんだと考えて、大たんに仕事をしていただきたいと思います。

（昭和四十六年七月日本幼稚園協会主催講習会より）